

# 移ろいの風景とデザイン

1g02j071-1 平山 隆太郎\*

Ryutaro Hirayama

日本は四季折々の豊かな自然に恵まれ、私たち日本人はそうした情緒深い風景に感動してきたことは、和歌や歳時記などからうかがい知ることができる。私たちが感じてきた移ろいの風景は、幾多の事例から自然現象が基となっていることが分かった。さらに、風景に移ろいをデザインするためには、主体が自然現象を直に感じることに、自然現象を視対象に顕在化させる 2つの方法があることを述べた。

*Key Words*: 移ろい、自然現象、時刻、季節、気象

## 1. 研究の背景と目的

日本の気候は温暖湿潤であり豊かな四季をもつ。また、国土が南北に長く地形も複雑なため様々な気候である。そうした環境の下、古来より日本人は季節の微妙な変化を敏感に感じ取ることができた。それは過去に見られる和歌に用いられた多数の季語や、日本人が感じていた季節感や自然感について歳時記という体系が存在していることから窺い知ることができる。また、室町時代に中国から伝わり風景鑑賞の一形式となった八景式鑑賞法は近江八景や金沢八景などとして定められたが、ここでは時刻や季節、気象が関わりを持っている。

現代に生きる私たちは時刻・季節の変化を陽の移ろいや気象、気温、草木の様子、また行事などから知ることができる。しかし都会の雑踏や騒々しさの中で本来日本人が共通して持っていた時刻や季節を感じるとる情緒的な感性が失われつつある。季節も社会も刻々と変わりゆくものだが、社会の変化が目まぐるしい昨今において人々はそちらに心が奪われ、季節の微妙な変化や時刻の移ろいを楽しむことを忘れがちである。

そこで現代社会に失われつつある日本の豊かな四季折々の風景や時間の流れによる風景の変化を明らかにする。そして現代に生きる私たちに分かりやすく、共感されるような景観づくりのために、その手法を示すことを目的とする。

## 2. 研究の位置づけ

小林<sup>1)</sup>は「移ろいの風景論」のなかで、風景を読みとるためには視覚だけでなく聴覚、触覚、嗅覚、味覚までも総動員する必要があるとし、景観の捉え方を人間身体の五感に注目して考察している。また、身体感覚が紡ぎ出してきた風景解釈の歴史的財産、とりわけ

言葉の収集と分析を行っている。さらにこれらをもとに移ろいを受信する装置や手法のデザインも行っている。しかし、雨など気象の変動要因に主眼を置くもので、時刻や季節に関するデザイン手法の提案は乏しい。

本研究は小林の研究を踏まえた上で、移ろいの概念整理を行い明確にするとともに、事例や調査から得られた移ろいの風景をデザインするための手法を大きく 2つに分類し、事例とともに手法を考案する。

## 3. 移ろいの風景とは

空を真っ赤に染める日の出や日の入り、鮮やかに紅葉した山々、春の朧となった月夜。このような風景はある瞬間や時季にだけ見ることができる。人々は自然が生み出した美しい風景に魅せられ、引き付けられる。



図3-1 日の入り<sup>2)</sup> 図3-2 紅葉する山々<sup>2)</sup> 図3-3 朧月夜<sup>2)</sup>

風景を鑑賞するということは、変化する風景のなかで、特に美しいとされる瞬間や時季を目でとらえ、耳で聞き、香りを感じ、肌で触れることである。冒頭に挙げた風景は、太陽の動きや木々の経年的な営み、朧雲の発生と月の動きなど、変化の根幹となる自然の変化によって生み出されたものである。このような継続的に変化する自然界の諸現象（以下、自然現象）が美しい風景を生み、私たちに感動をもたらす。したがって、あらゆる風景の変化は自然現象の上に成り立っていると考えられる。変化する風景の根幹となっている自然現象を明らかにすることで、風景の変化を操作できるのではないかと考える。

自然現象は時刻・季節・気象の 3つに分けて考えら

れる。時刻には太陽の動きや光、月の動きなどがある。季節には気温、湿度、天候、動物の営みや植物の経年的な変化などがある。気象には雨、風、雲、雪、霧など多くの現象がある。またこれら自然現象が相互に影響しあって風景が生まれる。ここで自然現象とは「自然界に見られる諸現象」<sup>3)</sup>であり、時間の流れに伴う自然界の変化である。このような自然現象の要因によって、移ろいの風景は生み出されるのである。本研究では移ろいの風景を、「時刻・季節・気象に応じて動きを示し、多様な表情を見せる風景の状態」<sup>4)</sup>と定義する。

すべての自然現象は時間の上で動くものであり、気象も例外ではないが、ここで3つに分けたのは、日常生活において感覚的に自然現象を分けるとの立場から、その方が分かりやすいからであり、したがって時刻・季節・気象という分類にした。

次に移ろいの風景をデザインすることを考える。その手法には2つの方法があり、1つは移ろいの風景を見る主体に意識させる方法、もう1つは視対象に自然現象を顕在化させる方法である。

例えば、観月の名所として有名な桂離宮では、観月のために月見台を設け、一瞬でも早く月の姿を望みとらえようとの意味から、高床とし、さらに空高く上がった月を何物にも遮られることなく鑑賞するために、軒を短く切りつめるなど月をより良く鑑賞できるように工夫を凝らし、移ろいの風景を見やすくしている。また、月の移ろいを顕在化させるために、楼の前に池を設け、池の水面に月を映りこませた。そうした風景を演出するために、月一池一視点場の組み合わせが意図的につくられている。

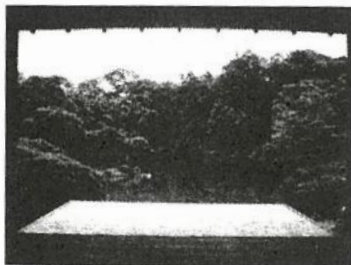


図3-4 桂離宮 4)

以上のように移ろいの風景は自然現象を基とし、2つの方法によってデザインが可能であると考えられる。

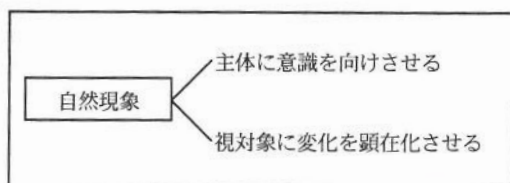


図3-5 デザインの概念図

#### 4.自然現象とは

##### 4.1 時刻について

時刻とは一日の時間をいう。このなかで、最も風景に影響を及ぼすのが太陽の動きであろう。

地球の自転により太陽は東から昇り、西へ沈むことが知られている。そのような日変化によって、風景においては数々の変化が起きる。

いうまでもなく太陽の動きによって生まれる風景には朝景・夕景がある。陽の出ずる、もしくは沈みゆく空や周囲の雲を淡い赤色に染めたかと思うと、目に映るものが全体に赤みを帯び、一日の始まり、もしくは終わりを告げる幻想的な風景が生まれる。また、東から西へという太陽の動きによって、陰の向きや長さを変動し、時刻のある瞬間の独特な風景を見ることがができる。

地軸は地球の公転面に対して垂直よりずれがあるため、太陽高度は一年を通して変動し、夏至に最も高く、冬至に最も低く、春分・秋分はそのちょうど間ほどの高さになる。また昼夜の長さも変動する。このような太陽の季節的な動きも陰の動きに影響する。

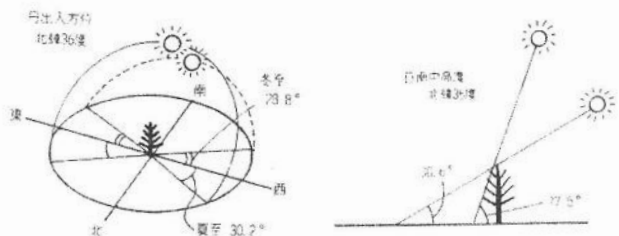


図4-1 影の季節変化<sup>1)</sup>

さらに、太陽から発せられる光には、照度や光束といった光のエネルギー量を示す単位があり、その様子も移ろいの風景に影響する。夏のキラキラと照りつける光が池の水面に映り、風が吹いて水面が揺れたりすると、ちらついた眩しさを覚えるといった経験は誰にでもあるはずである。

月の動きも時刻の自然現象を考える上で欠いてはならない。月も太陽と同様にして東から昇り西へ沈む。しかし太陽とは異なり、月はそれ自体が鑑賞の対象となる。月の運行は三日月に始まり、十五夜で満月を経て新月で死に、再び三日月に生まれ変わる。そこで月は古来、不老不死や永遠性、あるいは輪廻と結びつけられてきた。このような月の魅力に取り付かれた人々は観月の名所である桂離宮や銀閣寺を造り上げた。<sup>4)</sup>



図4-2 満ち欠け<sup>2)</sup>

空の色も自然現象である。こ

これは、太陽の動きや気象の様子に大きく依存している。

夕方、陽が沈み暗くなり始めると、あたりにぼつぼつと灯りがとまり、夜を迎えると昼間とは違う風景が生まれる。自然現象ではないが、このように照明も移ろいの風景をつくる大きな要因であり、見逃すことはできない。ただ、それ自体の色や明るさを考えると、その変化は多種多様である。本研究では照明自体の色や明るさの変化は移ろいとして考えず、昼夜の変化による明暗の逆転を顕在化するための装置として照明を考えることとする。

以上述べてきたように、移ろいの風景を考える上で、時刻の流れにおける自然現象は大分すると、太陽の動き・月の動き・空の色が考えられ、太陽の動きはさらに細分化される。

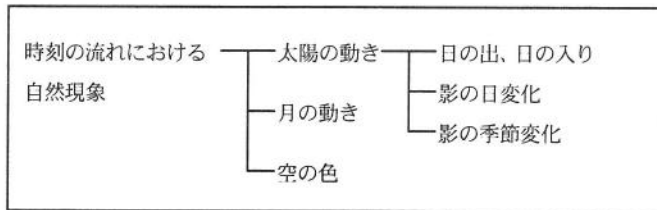


図 4-3 時刻の流れにおける自然現象

#### 4.2 季節について

季節とは「一年を天候の推移に従って分けたときの区切り」<sup>3)</sup>をいうが、この場合は一年の時間を指すこととする。

植物や天候の変化といった自然現象は、季節の移ろいを告げる自然からの合図である。古来よりそうした合図を、微かな変化から大きな変化まで捉え、俳句や短歌に詠い表現してきた文化が日本にはある。そのような季節感や自然感を詠う和歌で用いられた季語を採録し、解説したものが歳時記である。ここでは歳時記を参考にして、季節の変化における自然現象を探る。

参考にする歳時記は「俳句大歳時記」(角川書店、1973年)とする。この文献は、一年を春・夏・秋・冬・新年の5つの季節に分け、時候・天文・地理・人事・宗教・動物・植物の7つの項目に分類し、既存の多くの歳時記に明記されている季語の収集を行っている。歳時記に採録された季語は詠人の景観体験や心情を正確かつ如実に表す手段であり、その心は現代にも通じると思われる。また季語の表す情景は、特に気象に関して、生理的・物理的・天文的根拠とともに人の美意識を内包しているの、歳時記を参考にする意味は大きい。

表 4-1 は、各季節における項目ごとの季題数を表したものである。この表から、すべての項目のうち最も

多いのが、人間が行う事柄である人事に関する季語であることが分かる。たしかに、季節ごとの行事や季節に応じた生活によって、風景が一変することがある。自然現象ではない人事と宗教を除くと、季語数の最も多いのは、やはり植物である。また、時候や天文、地理についても自然現象と捉えることができる。

表 4-1 各季節における項目ごとの季語数

	春	夏	秋	冬	新年
時候	64	59	83	83	31
天文	59	88	79	67	14
地理	38	38	30	28	5
人事	300	559	319	478	372
宗教	144	184	217	147	201
動物	155	276	144	108	9
植物	305	535	371	106	22
(花木)	43	35	8	20	-
(果樹)	15	40	30	8	-
(樹木)	55	99	96	27	-
(草花)	42	103	38	13	-
(野菜)	43	69	39	12	-
(作物)	0	14	31	2	-
(野草)	88	163	112	20	-
(草)	2	5	16	2	-
(海藻)	17	7	1	2	-
合計	1065	1739	1243	1017	654

季節の流れにおける自然現象——植物、天文、地理

図 4-4 季節の流れにおける自然現象

#### 4.3 気象について

気象とは自然現象そのものであるから、すべてが移ろいの風景の要因となるが、その中でも特に影響の大きく発生頻度が多いものを考える。

一つは雨である。雨とは、大気中の水蒸気が冷えて雲ができ、雲の中で成長した水滴が地上に落ちてくる現象である。雨という気象現象の起こる前と後では、風景の印象が大きく異なる。雨水で濡れた地面の色は変化し、輝きを放つ。雨水によって水たまりや水の流れが現われる。気温は下がり、夏は涼しくなるが、冬は寒さがます。このように気象の中でも特に私たちに身近である雨という自然現象は、風景の変化に大きく影響するのである。

日本は世界的に見て雨量が比較的多い国である。このような環境下に



図 4-5 雨上がり 2)

において、私たち日本人は雨の様子や風景を表すため、様々な言葉を生み出した。表 4-2 は雨の言葉の例である。

表 4-2 雨の言葉 1)

状況	分類		言葉の例				
	強さ 時間雨量：mm		少ない ～1	やや少ない 1～3	普通 4～7	やや多い 8～15	多い 15～
状況			俄雨・微雨	霏雨・小雨・霪雨	霏雨	強雨・暴雨・猛雨・疾雨	大雨・激雨・驟雨・長雨・沛雨・滂雨・霖雨
	降方	準え	霧雨・霙雨・細雨・糸雨・霈雨・霡霂・篠雨・霏雨・霏雨・霏雨・霏雨		霏雨		
		継続の長さ	村雨・叢雨・通雨・淫雨・積雨・久雨・宿雨・淫雨・長雨・霖雨・他				
時間		様子	天泣・狐の嫁入り・濃雨・地雨・俄雨・驟雨・驟雨・急雨・白雨・電雨・雷雨・盆雨・他				
		一日	朝時雨・夕立・夕時雨・宵雨・小夜時雨・夜雨・他				
		特定の日	御山洗・虎か雨・洗車雨・酒洒雨・梅苔の涙雨・他				
		その他	甘雨・瑞雨・軟膏雨・快雨・沢雨・高雨・飛雨・山雨・陰雨・疎雨・木雨・他				

このように日本人は言葉によって雨の細かな分類を行い、それぞれを感慨深く感じとっていたのだろう。

次に、風も自然現象である。風とは空気のほぼ水平方向の運動であるため、見ることはできないが、風景を構成する草花や樹木に当たると揺れを引き起こし、視覚的に風を認識できる。したがって、風を風景に取り入れる際には、風によって揺れを起こす対象物の存在が不可欠である。

雲は気象現象である。雲とは空気中の水分が凝結して、微細な水滴や氷晶の群れとなり、空中に浮かんでいるものである。大気の状態によって発生する雲の色、形、現われる状態・時間・季節が異なり、それらを表すための雲の言葉は様々で多数ある。また時の移ろいとともに変幻自在に姿、形を変え、私たち見るものに様々な想像をかきたててくれる。雲の様子から天気を知ることができるように、雲は私たちに様々な天気の情報伝えてくれるのである。

雪は冬特有の自然現象である。雪とは雲の中で水蒸気が昇華し、成長した氷の結晶となって降ってくる白いものである。ひとたび積雪があると、地物は何もかもが雪で覆われ、普段見る風景とは違う、真っ白に雪化粧した世界に様変わりする。しかし日本において、日本海側と太平洋側では降雪量や雪の降り方が異なるため、一概に雪の風景が同じであるとは言えない。

気象については様々な自然現象が考えられるが、以上に挙げたものに霧という現象を加えた 5 つに絞りたいと思う。他にも露、霜、霰、霞、靄、雷、雹、霰など挙げるときりがないが、一般的に身近で発生しやすい現象だけに思慮をとどめることにする。

気象における自然現象 —— 雨、風、雲、雪、霧

図 4-6 気象における自然現象

### 5. 移ろいの風景のデザイン

ここまで、移ろいとはどういうものかを述べてきたが、この章では、移ろいの風景をデザインするための手法について考える。移ろいの風景は、時刻・季節・気象の 3 つの自然現象の変化によって生まれるものである。したがって、移ろいの風景をデザインするというのは、自然現象をいかにデザインし、主体に働きかけをするということである。

デザインの手法は 2 つに分類できると考える。1 つ目は、移ろいの風景に主体の意識を向けさせる方法である。例えば、図 5-1 のような演出がそうだ。

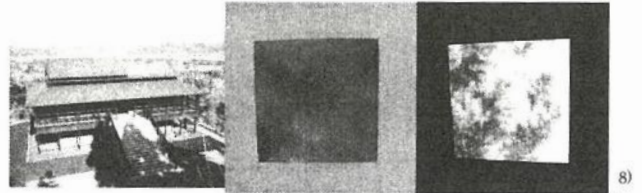


図 5-1 光の館 ジェームス・タレル作

これは、ジェームス・タレル作の光の館である。屋根は開閉式で、正方形に切り取られた天井からは空を望むことができ、まるで空が切り取られたように見える。左が夕暮れの写真、右が朝の写真である。天井と空の色や模様対比がおもしろい。空の色の変化や雲の動きという自然現象が目向き、時間が移り変わるとに違った風景を見ることができる。このように、自然現象そのものの移ろいを主体に意識させることで、移ろいの風景をデザインできると考える。

2 つ目は、自然現象の移ろいを視対象に顕在化させることである。つまり、自然現象を受けて移ろいを示す視対象をデザインすることである。

例えば、図 5-2 は Gustafson Porter 作の Esso Headquarters である。土地の傾斜を利用して緩やかな波状の起伏をつけ、段差やコンクリートの壁面によって陰影を表現している。陽の位置によって陰影の出方が変わりこの場所に表情を持たせている。このように、土地の起伏やコンクリートの壁面によって、自然現象である太陽の動きに伴う影の日変化をより一段と際立たせ、移ろいの美しく、分かりやすい風景を造っている。



図 5-2 Esso Headquarters Gustafson Porter

以上のように、移ろいの風景をデザインする手法には 2 つの方法がある。次に、どのような事例があるのかを具体的に挙げる。ここでは時刻、季節、気象の 3 つの自然現象に分けて事例を挙げる。

5-1-1 時刻

主体に働きかける	
空を切り取ることで、その移ろいに気づきやすい。 11) 14)	建造物によっても空を切り取る事が可能である。 13)
空とビルの対比によって、図と地が反転される。 22) 22)	月見台などの設置で、月の動きが鑑賞しやすい。 10) 4)
視対象に自然現象を顕在化させる	
日影を壁面に映し、壁に明るさのコントラストを与えている。 14)	樹木を並列に配し、その影を壁面に映しているので影の動きが分かりやすい。 17)
ガラスの壁面は太陽の動きを映す。 18)	柱の陰と水面に映る虚像が、柱の存在を際立たせる。天候によってもその効果が変わる。 18)
歪みや乱雑さのなく直線的な構造体は、日影の動きが分かりやすい。 18)	昼夜の変化による明暗の逆転が明かりによって強調されている。 20)

5-1-2 季節

主体に働きかける	
桜や紅葉は季節を象徴する樹木で、主体はその変化に気づきやすい。 12) 22)	道の両側を樹木で覆うことで、その変化に気づきやすい。 22)
山あてによって山々の色の移り変わりが示される。 10)	ブナはレンガを背景にすると引き立つように、樹木は背景によって存在の大きさを変える。 13)

視対象に自然現象を顕在化させる	
壁面に雪や霜が残り、長くその印象が残る。 9)	雪の残る部分と解けてなくなった部分とのバランスがおもしろい。 22)
花びらや落葉と地面の色を対比させることで、その印象がより深まる。 12) 12)	寒い時期にしかできない、霜を網に付着させ、壁を作った。 19)

5-1-3 気象

主体に働きかける	
外と空間的に仕切られた場からでは、気象の変化が鑑賞しやすい。 13)	植物が主体に近いと、水の滴りを感じやすい。 12)
視対象に自然現象を顕在化させる	
人工物や植物等、風によって動きを示すものを規則的に配することで、風が視覚的に見える。 2)	雨によってできた雨水の流れを地表面に出し、雨の印象を強める。 15)
雨は水面に当たることでより顕在化される。 22)	雨によってできた水たまりは見えていなかった風景を造る。 10)
水の揺らぎが風を感じさせる。 13) 16)	濡れると色を変える素材は変化の印象を深くする。 20)
水面に映る空はその形に切り取られ、雲の動きが見やすく、わかりやすい。 14) 10)	崖や壁面が粗かったり、凹凸があると雪や雨の作用で模様を生じる。 11)

5-2 移ろいの風景のデザイン手法

5-1 では、移ろいを感じさせる風景の事例を挙げたが、ここでは数々の事例を参考に移ろいの風景のデザイン手法を考案する。

手法を考案するにあたっては、移ろいの風景のデザインをデザインポキャブラリーとして考える必要がある。ここでその一例を挙げる。

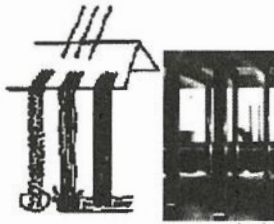


図 5-3 落水形態 1) 11)

雨が降ると、屋根からの落水や溝を流れる雨水、濡れによる地物の輝きなど、雨による景観の変化は大きい。落水形態は移ろいを感じさせる手段の一つである。

人の動線に沿って落水の位置を等間隔に配することで、雨量の変化が落水の状態からわかったり、落水を全面的に施し、水の壁が一時的に現れるようにするなど考えられる。このように人の動線や主体と視対象との位置関係を把握した上で考えられるデザイン手法は数多くある。

5-2-1 時刻

主体に働きかける	視対象に顕在化させる
日の出、日の入、月への眺望 一太陽や月の動きを考慮し、眺望できる場を設ける。	等間隔、平行、垂直、並立、高低差 一建造物、樹木、モニュメント、地面等の陰影の動きを顕在化する。
枠取る 一構造物によって枠を造り、主体の視線を空に向けさせる。枠と視対象の色にコントラストを与える。	反射物の設置 一ガラスや水面によって自然現象を映す。
図と地の反転 一空と建造物の壁面の色を対比させることで空の色の变化を引き立てる。	切り取る 一壁面を切り取り、日影を外から取り入れる。定まった方向からの光を取り入れると一時的な採光となり、常に光を取り入れると日影の動きを感じられる。
日の当たる面の調節 一太陽高度や日射時間を考慮して、屋根や壁面の形状や位置を決定する。	

5-2-2 季節

主体に働きかける	視対象に顕在化させる
植栽を施す 一草花や樹木の変化が顕著に現れる時期を調査し、それぞれのバランスや組み合わせを慎重に検討する。	花びらや落葉を強調 一地面に対比させたり水の流れによって存在を与える。
山あて 一山々の色の变化を見せる。	雪や霜を顕在化 一ペーパメントを違えたり、積雪に高低差を与える。
樹木と背景との対比 一主体が植物を観る方向を考慮し、植物と背景の色の計画を行う。	梅雨の見え 一長期の雨に備え、雨天時の景観を考慮する。

5-2-3 気象

主体に働きかける	視対象に顕在化させる
空間操作 一気象が鑑賞できるよう空間配置を検討する。	雨水の流れ 一地上に現れた水の流れをデザインする。 一水溜りの形状をデザインする。
水の滴り 一水滴による池の波紋の見えや地物の揺れを主体に接近させる。	風のデザイン 一水のゆらぎや植物、人工物によって風を視覚的にする。
質感 一気象によって変化する素材を多様化する。	落水形態 一場所に依りて落水の形態を変え、雨の印象を強くする。

6.まとめ

移ろいを感じられる風景の事例や歳時記から、移ろいの風景は自然現象が引き起こすものであることがわかった。また、自然現象のうちとくに、太陽の動きと植物の経年的な変化、雨という気象現象が景観に大きく変化をもたらすと考えられる。

このような自然現象はあらゆる地域にみられるが、場所や地形によって地域特有の自然現象も多く存在し、それが地域の個性の一つとなる。したがって、移ろいの風景のデザインのためには、対象となる地域の自然現象を理解することが必要となる。

参考文献

- 小林享著：移ろいの風景論、鹿島出版会（1993）
- 高橋健司：空の名前、角川書店（1999）
- 松村明・三省堂編修所：大辞林 第二版（2005）
- 宮元健次著：月と日本建築 桂離宮から月を観る 光文社（2003）
- 篠崎伸・志摩邦雄・小柳武和：歳時記的要素に配慮した都市の空間構成に関する研究－「ひたち都市環境写真コンテスト」応募作品と「ひたち名所図会」の分析－、都市計画学会学術研究論文集
- 角川書店 編：俳句大歳時記・春、夏、秋、冬、新年、角川書店（1973）
- 景観デザイン研究会：景観用語辞典 彰文社（2003）
- <http://www.page.sannet.ne.jp/matsuda-k/travel/t-0407/travel-0407.html> より
- Moving Horizons, The Landscape Architecture of Kathryn Gustafson and Partners
- new urban design/NIPPAN/2003
- 自然に潜む日本/矢萩喜徳郎/1993
- 京・四季の移ろい/岡田克敏/1988
- PROCESS:Architecture/発行所（株）プロセスアーキテクチャ 編集者小宮山昭
- Dictionary of Today's Landscape Designers/Pierluigi Nicolini, Francesco Repishti/2003
- WATERSCAPES/Herbert Dreiseitl, Dieter Grau, Karl H.C.Ludwig/2003
- Stucco Stone and Steel/Edition Topos/2003
- Event Landscape/Birkhauser/2003
- Modern Landscape/Michael Spens/2003
- SD8808/鹿島出版会/1988
- 建築文化 vol. 55 no. 649 11
- [http://www.downtownexpress.com/de\\_86/dec27onlyalittle.html](http://www.downtownexpress.com/de_86/dec27onlyalittle.html) より転記
- 筆者撮影